

【国語】

実践事例：小学校3年生 / 実施機関：南魚沼市教育委員会（新潟県）

●教科における学習上の予想されるつまずくポイント

- ・音読が苦手であるので、授業進度について行けない。
- ・書くことに苦手意識をもっているので、自分の考えをもっている、ノート等に記述することを好まない。結果として、発言も少なくなってしまう。
- ・授業に集中できず、聞くことも疎かになってしまう。

【指導例】

1. 対象とした児童生徒の実態

(1) 対象の障害

- 自閉症 情緒障害 LD（学習障害） ADHD（注意欠陥/多動性障害）
その他

(2) 子供の困難さ

- 見ること 聞くこと 話すこと 読むこと 書くこと 動くこと
コミュニケーションをすること 気持ちを表現すること
落ち着くこと・集中すること 概念（時間、大きさ等）を理解すること
学習（計算、推論等）すること その他

・読むこと（音読）

たどたどしく、つかえながら読んでいる。周囲の児童が読み終わってしまうと、最後まで読むことを諦めてしまうこともある。

・書くこと

書く材料を持っていても、文章として表すことは取りかかりが遅い。

・集中すること

活動内容を理解していないということではないが、ぼんやりと過ごしてしまうこともある。

2. 教科における学習上のつまずきを把握するための方策

(1) 実態把握の時期

令和元年4月から令和2年3月

(2) 実態把握の方法

実施者 学級担任 スーパーバイザー

方法 全国標準学力テスト MIM-PM（月例実施） 授業観察

3. 指導内容

(1) 教科における学習上のつまずきの内容

- ・音読がたどたどしく、スムーズに読むことができない。読むことに時間がかかり、最

最後まで読むことを諦めてしまう。

- ・どのように書いたら良いのか分からないと思っているために、文章表現への苦手意識が強い。

(2) つまづいている背景・原因

- ・語彙の少なさ、文節の理解不足が主たる要因である。分かち書きの意味を十分理解しないままに読み続けてきたことを見逃されてしまった。
- ・読むことに自信をもてないで、臆病になってしまっている。
- ・語彙が少ないために、自分の考えを言葉にすることに不安感をもっている。

(3) (1) に対し実施した指導方法、工夫した点

(i) 授業における全体指導、個への指導について

① 授業の見通しをもたせる〈授業の目指す事柄、ゴールと道筋を自覚させる。〉

- ・単元の目標を児童に提示し、設定の理由を丁寧に説明する。
- ・単元の指導計画を児童とともに作成する。同時に各時間の目標を決める。
- ・単元の指導計画を毎時間教室に掲示して、主体的な取組を促す。
- ・各時間の目標達成のための学習課題を決めた後に、目標達成度の評価規準を児童と決める。目指すゴールを明確にする。
- ・毎時間の板書もしくは学習履歴の分かるものを教室に掲示する。



(評価規準)

② 学習手法の選択〈学習支援用具の準備〉

個人の学習手法の希望に添うことができるように、用具等を整備する。

- ・タブレット（音声ソフト）音読支援
- ・ヒントカード（読解、場面把握等）
- ・「見て回り活動」（級友との情報交換をすることで理解を確かなものにする。自分だけで考えることも良いこととする。）

③ 具体的な指導〈繰り返し指導し、強化を図る。〉

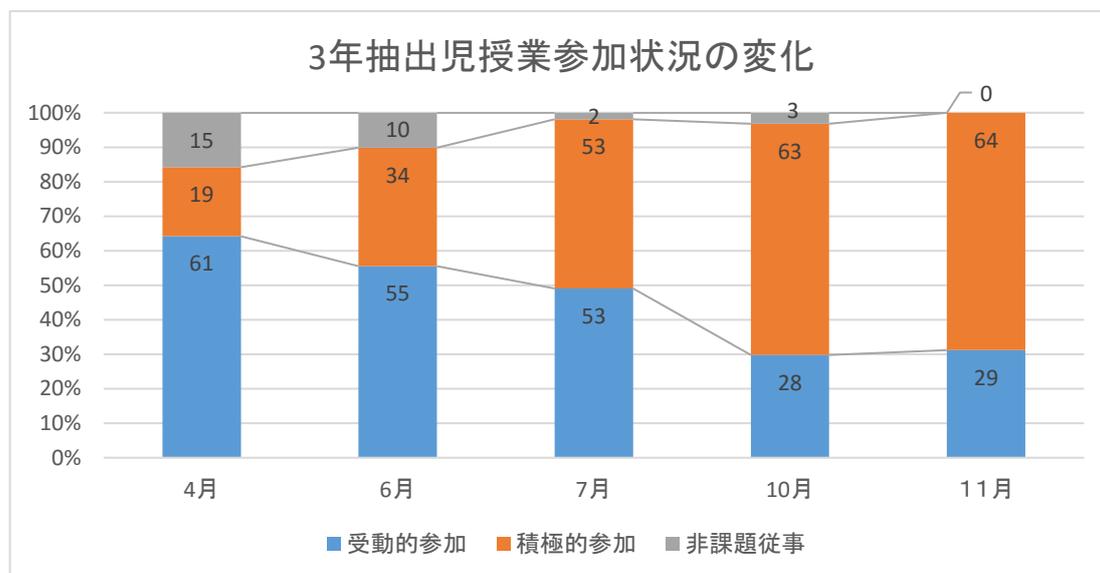
- ・音読の際の留意事項：「ゆっくり」「はっきり」あわてず丁寧に読む。
- ・音読の「ねらい」を丁寧に説明し、「ねらい」に沿った読みに対する自覚を促す。
- ・「見て回り活動」については、まず、自分で考えることが基本で大切なことであること。その考えを持ち寄って、仲間と協力して考えることはとても素晴らしいことであること。級友と聞き合うことはとても大切な学習活動であることを伝え続ける。

(ii) 個別指導について

- ・漢字の読み書き等は、テストの結果を見ながら、補充指導の後再テストを行い、自信をもたせるとともに、練習の成果を実感させる。

(4) (3) の効果・評価

① 授業参加率の変容



② 児童の変容

- ・音読のたどたどしさの変化はない。ただし、皆から遅れても最後まで読もうという意思がみられるようになった。
- ・タブレットを使うことで、安心して学習に取り組むことができている。また、聞き回り活動等にも積極的に取り組むようになり、「分かったふり」をすることがなくなった。
- ・本時の授業の評価規準を意識しながら、さらに高いレベルへの追究意欲が高まった。

③ 授業評価

- ・児童に見通しをもたせる実践はそのまま教師の見通しの具体化に繋がっている。
- ・抽出児童の観察は他の児童の観察にも通じて、授業展開での細やかな心配りを意識するようになった。
- ・個別の支援策の種類、方法について今後も研究実践を続けることが大切である。

【社会】

実践事例：小学校4年生 / 実施機関：南魚沼市教育委員会（新潟県）

●教科における学習上の予想されるつまずくポイント

- ・社会的事象に興味をもつこと
- ・授業で自分の目標をもつこと
- ・社会的事象にかかわる課題に合った資料を選ぶこと
- ・資料やグラフを読み取ること
- ・調べて考えたことを表現し、話し合いに参加すること
- ・学びを振り返り、見直しをもつこと

【指導例】

1. 対象とした児童生徒の実態

(1) 対象の障害

- 自閉症 情緒障害 LD（学習障害） ADHD（注意欠陥/多動性障害）
その他

(2) 子供の困難さ

- 見ること 聞くこと 話すこと 読むこと 書くこと 動くこと
コミュニケーションをすること 気持ちを表現すること
落ち着くこと・集中すること 概念（時間、大きさ等）を理解すること
学習（計算、推論等）すること その他

- ・資料を読みとって学習課題を考えることが難しく、学習意欲が低下している。
- ・資料に基づいて、自分の考えを組み立てることが難しい。
- ・自分の考えを表現し、話し合いへ参加することが難しい。

2. 教科における学習上のつまずきを把握するための方策

(1) 実態把握の時期

令和元年4月から令和2年3月

(2) 実態把握の方法（実施者・方法）

授業の参加率の変容を把握する。（授業者・スーパーバイザー、ビデオ分析）

3. 指導内容

(1) 教科における学習上のつまずきの内容

- ・社会的事象に興味をもつこと
- ・授業で自分の目標をもつこと
- ・社会的事象にかかわる課題に合った資料を選ぶこと
- ・資料やグラフを読み取ること
- ・調べて考えたことを表現し、話し合いに参加すること
- ・学びを振り返り、見直しをもつこと

(2) つまずいている背景・原因

- ・児童のいろいろな学び方（得意な学び方）に対して、教師が一つの教え方にこだわり、教師主導の授業になる。
- ・社会的事象を説明している文章や資料の内容の理解が不足し、授業参加率が下がり、学習意欲が低下する。

(3) (1) に対し実施した指導方法、工夫した点

(i) 授業における全体指導、個への指導について

つまずきの内容に対して、単元全体を通して自己調整学習の力を育てることに取り組んだ。

- ① 「なぜ学ぶのか」「どのように学ぶのか」がわかるために、子供と話し合いながら評価規準をつくる。
- ・単元の学習計画は子供と一緒に作り、社会的事象への興味を高めた。
 - ・単元の評価規準の言葉は、子供が具体的なゴールをイメージできるものにした。

・単元の評価規準の例 ごみを減らすために自分ができることを考えよう。

S 自分の生活と結び付けて、ごみを減らすためにできることを実行する。

A 自分の生活と結び付けて、ごみを減らすためにできることを考える。

B ごみを減らすためにできることを考える。

C ごみを減らすためにできることを、友達と相談して考える。

・Bの規準は授業者が示し、他のS、A、Cは授業者と子供で話し合い決定する。単元の学習内容を子供が主体となって考えることができた。

・子供とつくる1時間の目標、段階のステップアップ、自ら取り組もうとする意欲を高めた。

・1時間ごとの評価規準の例

S 自分の考えを話し、友達を納得させることができた。

A 自分で考えることができた。

B 友達といっしょに考えることができた。

C 友達に聞いて考えることができた。

② つまずき内容のある子が自分の考えをもつために、思考法を選択できるようにした。

・一人で考える

・「見て回り」活動を多く行った。「見て回り」とは、仲間を呼んで分からないことを伝える、仲間がどう考えたか見て回ることである。

・先生に聞く。

③ 調べる方法を児童が選択できるようにし、課題に合った資料を自分で選べる環境を整備した。

- ・ 情報端末タブレット
- ・ 教科書、資料集
- ・ デジタル教科書、クリップ動画

④ つまづき内容のある子が話し合いに参加するために、少人数の交流の場を多く用いた。

- ・ 話し合いでは、自分で考えることが基本で大切なことであること、考えを持ち寄って仲間と協力して考えることはとても素晴らしいことであること、仲間と聞き合うことはとても大切な学習活動であることを伝え続けた。
- ・ 話し合いでの子供たちの組み合わせを多様にした。

⑤ 次の時間や学びにつながる振り返りができるように、目標に対しての自己評価をわかりやすくした。

- ・ 「何が分かったのか」「できるようになったのか」が自分で振り替えられるようにし、自分が設定した目標に対して、S A B Cの評価をできるようにした。児童が、自分の学びを意識しながら授業に参加するようになった。

(ii) 個別指導について（取り出し指導、通級による指導との連携など）

- ・ グラフの読み方の取り出し指導を行った。数値の読み取りでは、グラフの縦軸と横軸に補助線を加えることで、読み取りやすくなることを理解できるようになった。
- ・ 用語について、情報端末等を利用しながら、教師と意味を確認しようとする意欲を高めた。

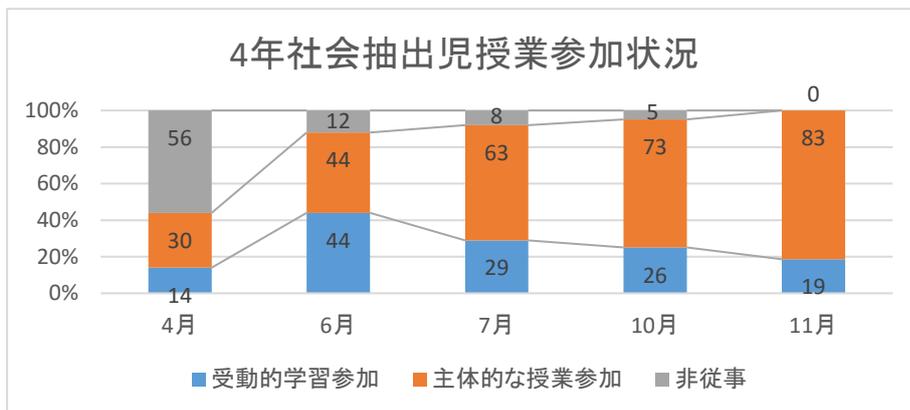
(4) (3) の効果・評価（児童生徒の様子や変容および授業の評価）

① 児童の変容

児童 A の変容前の姿	児童 A の変容後の姿
○ 社会的事象に興味をもつこと ・ 学習内容を自分の生活と結び付けることができず、興味をもてない。	→ 授業時に観察したごみの実物等の社会的事象と自分の生活を結び付けて考えることができるようになってきた。
○ 授業 1 時間の目標をもつこと ・ 授業 1 時間の目標をもつことが難しかった。	→ 評価規準のやり方に慣れ、S A B C の考え方に慣れ、B または A の目標をもつことができるようになった。

<p>○社会的事象にかかわる課題に合った資料を選ぶこと</p> <ul style="list-style-type: none"> ・資料を選ぶことができない。意欲ももてない。 <p>○資料やグラフを読み取ること</p> <ul style="list-style-type: none"> ・教科書等の資料どこを見ればいいのか、迷っていることが多かった。 <p>○調べて考えたことを表現し、話し合いに参加すること</p> <ul style="list-style-type: none"> ・自分の考えがある時でも、自信がもてず話し合いに参加できずにいた。 	<p>→調べる方法を選択できる場面では、自分でタブレットを選択し、必要な情報にたどりつくことができた。</p> <p>→いっしょに調べた仲間とわからない言葉を確認し合うことができた。</p> <p>→「見て回り」活動に慣れ、仲間を呼んで分からないことを伝えたいことが話せるようになった。</p>
<p>○学びを振り返り、見通しをもつこと</p> <ul style="list-style-type: none"> ・授業の終末の振り返りの場面では、何も書けないことが多かった。 	<p>→評価規準の自己評価でBを選択できるようになった。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・社会的用語を用いて、自分の学びを書けるようになった。

②参加率の変容（％）



③ 授業の評価

- ・自己調整学習の力が高まった。自ら学習の目標をもち、解決方法を考え、集中して調べ考えることができるようになり、考えたことを仲間に伝えられるようになってきた。
- ・児童のいろいろな学び方（得意な学び方）を活かした授業が行われるようになり、教師主導の授業から子供が主導する授業になってきた。
- ・社会的事象を説明している文章や資料の内容について、子供が意欲的に調べるようになり、自分が調べたことを仲間に伝えようとする学習意欲が高まった。